

聖女



特117
40

法隆寺大鏡



国立国会
51.10.1
図書館

第四集

法隆寺大鏡第四集挿圖解説

第一、五重塔

初重	方一尺二寸	軒高三尺九寸
二重	方一尺一寸	軒高三尺七寸
三重	方一尺	軒高三尺五寸
四重	方九寸	軒高三尺三寸
五重	方八寸	軒高三尺一寸

伽藍配置の妙は其全般の光景如何にありと雖、各宇の形状の變化、與かりて最も力ありとなす、峙つ者伏す者各其形を異にして、然かも全景の整備と興趣とを與ふるは、これ配置の遺妙を極めたるもの、唯法隆寺に於て其意義を傳へたりと云ふべし、其重層の金堂、平面に延びたる講堂、更に鐘樓鼓樓の廻廊と相交はりて、配置の全景に鮮やかなる輪廓を畫くありと雖、五層塔婆獨り高顯して、遠望既に梵唄の雲間に搖曳するの感あらしめ、近くは金堂と權衡を保ちつゝ、講堂に深遠の趣を呈せしむるなくば、伽藍の莊嚴、配置の諧調、何に由つてか保たるべき、塔は三間五層より成り、基軸の高さに比しては、屋蓋奮翮の度を緩く且つ大ならしめて、全景に莊重の感と與へ、毎層の屋蓋は出入大小替代して均一ならず、後世の一層は一層より羽翼の長さを減縮して、軒端一直線に相連なるものとは、全く其撰を異にす、國寶帖に云ふ、初層より四層までは方三間にして、柱間は漸く減縮せるを以て、第四層の斗拱の肘木の端は相接して、一の雲斗を共有するに至り、第五層は斗拱の衝突を避けんが爲め、特に方二間となし以て多少の變化を呈せしめたりと、こは實に局部熟視の上の用意にあらずして、外觀上の大局より打算したる手法の周密を證するに足る、古今目錄抄に又在裳階每層四面皆板畫最勝所說四種龍王之名打之九輪最下輪四角立鏤此等皆爲避除龍王之難

也又下層四角懸窓候每角寶鐸懸最上層最下層四角上層雲珠在内外陣、外陣連子内壁也とあり、此等の懸垂裝飾は多く散逸して舊觀を存せず、甚だ惜むべしとなす、塔外部は丹土もて塗り、内部の組入天井には格間に藻文を彩どる、四天柱内には塑土もて須彌山を築き、涅槃像土彌勒佛土維摩詰像土分舍利佛土の變相を現はし、四面に各一佛土を配す、塔の創立詳かならずと雖、其様式の金堂と同一なるは、推して以て法隆草創當時の建築と定むるを得べく、四佛土變相は既に前集に云へる如く、塔成つて後、和銅四年歲次辛亥寺造者と天平資財帳に明記せられたり、

第二、白檀九面觀世音菩薩立像

全長一尺二寸九分
蓮座高一寸九分五厘
自寶冠至膝一尺九分五厘
蓮座徑二寸七分

彫像の材料佛典に載せられたる者多しと雖、紫磨金像を除きては、恐らく香木像を以て第一と推さざるを得ず、總て香木以外の彫像に在りては、必ず粉練潤色の法を採れりと雖、沉香白檀の類は、其資料を重んずるよりして、素木の儘なるを常とす、本像既に白檀なるが上に、技巧の精妙殆ど其極に達し、裝飾瓔珞の微細に至るまで、刻鏤餘す所なく、然かも眉目の森嚴、態度の莊重、壽として丈六尊を凌ぐものあり、かくの如きは獨り檀像として珍なるのみならず、實に本邦彫像界の優品と推稱するに足る、其面貌其裝飾皆唐代成熟の造像と其撰を一にするもの、或は資財帳に檀像壹具右養老三年歲次己未從唐請坐者とあるは此像にあらざる無きか、若し然らずとするもよく唐法に練熟して之を格守せる人の手に成れるならん、九面

像は他に類例なし、或は云三個の忿怒面に一面を略し、又三個の嬉笑面に一面を略すれば、九面また十一面たると義に於て同一なりと、姑く一説として存す、蓮座は檜材、蓮花には鐵條を刻せず、蓮莖には單純なる刻線あり、思ふに本像と其時代を一にせず、檀像には材料の希有なるを以てか等身大なる者なく、空海等の將來品には小龕佛像として此種の小像多し、然り而して檀像の舶載に俟てる所以は、則ち平安朝密教造像の一木彫成法を動かせる本因と見るべからずや、

第三、網封藏 木造如意輪觀世音菩薩坐像

丈座高共六寸九分 光背高九寸
天蓋高五寸九分 竿長二尺三寸八分

佛身は截金模様にて嚴飾し、蓮肉座と一木より成る、蓮肉を圍める花瓣は六遍莖、下に花盤あり榎あり、皆極彩色に截金を飾る、次の方座は香狹間付黒漆塗、四邊に金物を散らし、香狹間には青蓮花を畫く、光背二重光の部分はまた截金を施し、覆輪は漆箔、周圍は鍍金寶相花の透彫より成る、天蓋は八方吹返付中心に八葉を配す、また粉色其美を極む、蓋端吹玉繫の瓔珞を垂れ、佛身思惟の相につれて自ら左右に搖動するに似たり、かくて天蓋は龍首の口に懸り、龍首は一竿の端より垂れ、影無うして韋駄天これを護持するの威あり、像身小なりといへども、裝飾の微を盡くし細に入り、一具の懈怠なき殊妙の全相は、何れの時何人の祈願によりて造られしか、傳へいふ聖德太子無二の忠僕調子丸が念持の本尊なりと、實にこれ常住持念の本尊として造られしものたること、其形相の小にして、方丈庵室、獨自瞻視渴仰に便なるを觀ても明らかなり、されど調子丸護持

の舊容依然として今に傳存せるにあらず、蓮座の裏に墨書の銘文ありつて云

此像者調子丸子孫相傳之本尊也、去正嘉二年^{戊戌}九月十六日、參聖靈院之次、依願真大法師^{調子丸二之勸不日奉迎同十一月下旬、始脩補之、箇中寶珠御身細金念珠蓮花輪御光花葉花盤栴檀花蓋圓座方座、如形造加焉}同三月十五日安置當院爾

願主 西大寺衆首比丘 叡尊

奉行比丘 盛遍

即ち知る像身のみは往古の傳持に係りしが、正嘉年中叡尊上人の手によりて修補せられ、附屬裝飾具一切また同時に完成せられたるなり、像身の調子丸親侍のものたるや如何も、今細金彩色を加へられたる上にては、之を推すに詮なく、末裔願真法師が古傳を存したりと云ふに止めんとす、細心精緻の刻鏤は鎌倉時代の光彩にして、かかる方面の嚴飾法に景仰せんとするも亦其時代精神たり、これを金屬に求むれば金澤稱名寺の愛染明王をとるべく、これを木造にしては本寺の此像冠冕たるを失はず、しかも其一切の具足は本像遂に稱名寺像を凌げり、叡尊上人は鎌倉時代に於ける真言律の復興者たると共に、又由緒ある古尊像の保護者たり、其力に頼りて修補完成せられ、今に傳ふるを得たる者鮮しとせず、額安寺の遠慮空藏菩薩像本寺の此像の如きは、特に其顯著なる者とす、其修理法彼の漫然補修し糊塗し、以て一時の盛觀を快とする者にあらず、用意周密、古容を損せず舊調を參酌し、傳持に完全なるを期して然る後、始めて必要なる莊嚴具を附加す、其一切修理附加する所は、必ず之を莊嚴

具の一部隠匿の處に明記して、一は後世の疑惑を避け、一は責任の存在を確實にす、この嚴明周到なる保存法は誠に上人の如き熱烈なる信念に本づくと思、百代の下須らく範を此に仰ぐべしとなす、像正嘉の頃西大寺に移されたる後、再び本寺に復歸したる年代を詳かにせず、調子丸の遺靈太子に纏綿して自ら事の此に及べるか、

第四、御物 法隆寺獻物帳 原寸

獻物帳のこと既に第二集に説き盡せり、更に原形に擴大して其面目を明かにするに便す、

第五、御物 壺鏡

鐵製、古今目錄抄既に壺鏡一具として著録す、其製奇古、鏡を半截したる形を爲し、以て乘御に便ならしむ、太子時代の遺品として、類例他に存することなし、

第六、御物 鐵鉢 原寸

傷損腐蝕の痕多く、舊時の面目庶幾し難けれども、正にこれ鐵鉢中の最古の者、傳へて弘法大師の所用といふ其謂はれ無きにあらず、

第七、御物 猿面硯 原寸

硯は土製、表に渦紋を散らし、背を黒漆にて塗る、延喜式主計式諸國の貢調を列記したるうち、備前國の條に猿藤研十八合を擧ぐ、猿藤はさるあしと調ず、後轉じて猿面となれるか、備前は博埴の技に長じ、土器の貢調其多きを占む、其瓦研たるや疑ふべからず、此硯また當時の貢上に係れる一種なるべし、

第八、御物 伎樂面 竪九寸五分 横四寸五分 鼻高五寸九分

木造著色、前集載録し來れるものと其類を同うす、今別に贅せず、

第九、御物 羯鼓臺 前幅八寸四分 高七寸七分 横九寸

表面朱漆塗、内面黒漆塗、盤上兩處に窪みを造り、以て鼓を安んずるの用とす、

第十、御物 琥珀念珠 付貫 原寸

琥珀一に虎魄と書し、又江珠明玉神珠の稱あり、和名阿加多末一名阿末多末と云ふ、漢土にては早く之を器具に裝飾し、以て尊重愛翫の意を致せり、佛教藝術輸入の結果、また之を念珠に用ふるに至り、其風延いて我國に及び、無上の法具として貴重せられしこと、東大寺獻物帳に虎魄念珠一具、又御室資財帳に琥珀御兒珠貳連など見えたるにて證すべし、此念珠また此等と同種にして、奈良朝時代を下らざる名品なり、嘗て散亂せしを貫きとめしか、緒は既に舊時の者にあらず、存する所八十三顆、其數を缺くに似たり、宮は銅製、蓋に蓮花身に同じ唐草を毛彫にす、徳川初期の改修と思はるれど、また精巧の技たるを失はず、

第十一、御物 梵文心經及尊勝陀羅尼 十四卷

第十二、御物 同譯文

貝多羅葉梵文二片は、夙に迦葉尊者の筆と傳へらるゝ如く、我國現存の梵文中最古の將來に係り、三井寺唐院の智證大師船載本、河内高貴寺嵯峨清涼寺等の梵筭と相並びて、梵文界の鼻祖たり、第一葉の書首多心經の三小漢字あり、次て6印(の印)を以て本文を起す、第二葉の6印に至るまで、總て八行は般若心經、第二の6印の脇に又小さく佛頂の二字あり、所謂佛頂尊勝陀羅尼の梵文これより起りて五行に至りて盡く、其行末羯磨形したるは暗字、長短線の並び立て

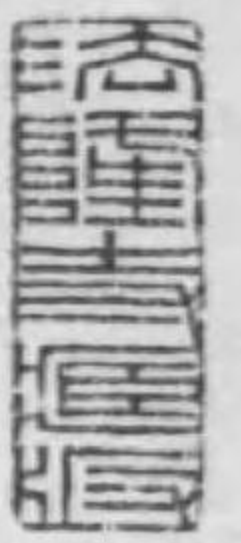
るは惡字なり、最後の一行は即ち悉曇十四音とす、悉曇學の大家淨
嚴これを精査して譯文を作り、特に尊勝隨羅尼に就ていはく、佛隨
波利杜行頌地波阿羅^二義淨無畏不空趙宋法天八本悉皆大同小異未詳
誰譯本と、其八家本以外別傳の梵文たるを證すべし、又十四音につ
いては十四音則婆多之中加紇里等四文知是天竺梵字也と驚嘆せり、
貝葉梵文として稀觀の名本たるはさることながら、淨嚴師の研究を
俟つて、其光や更に明らかなりと云ふべし、淨嚴師の譯文には誠に
元祿第七龍集甲戌十月末堅東都靈雲沙門釋淨嚴書并跋とあり、名本
に對して滿悅の情に勝へずやありけん、更に歡喜無量并踊岡措の二
句を添へたるは、益此書の光彩を發揮するものといふべし、

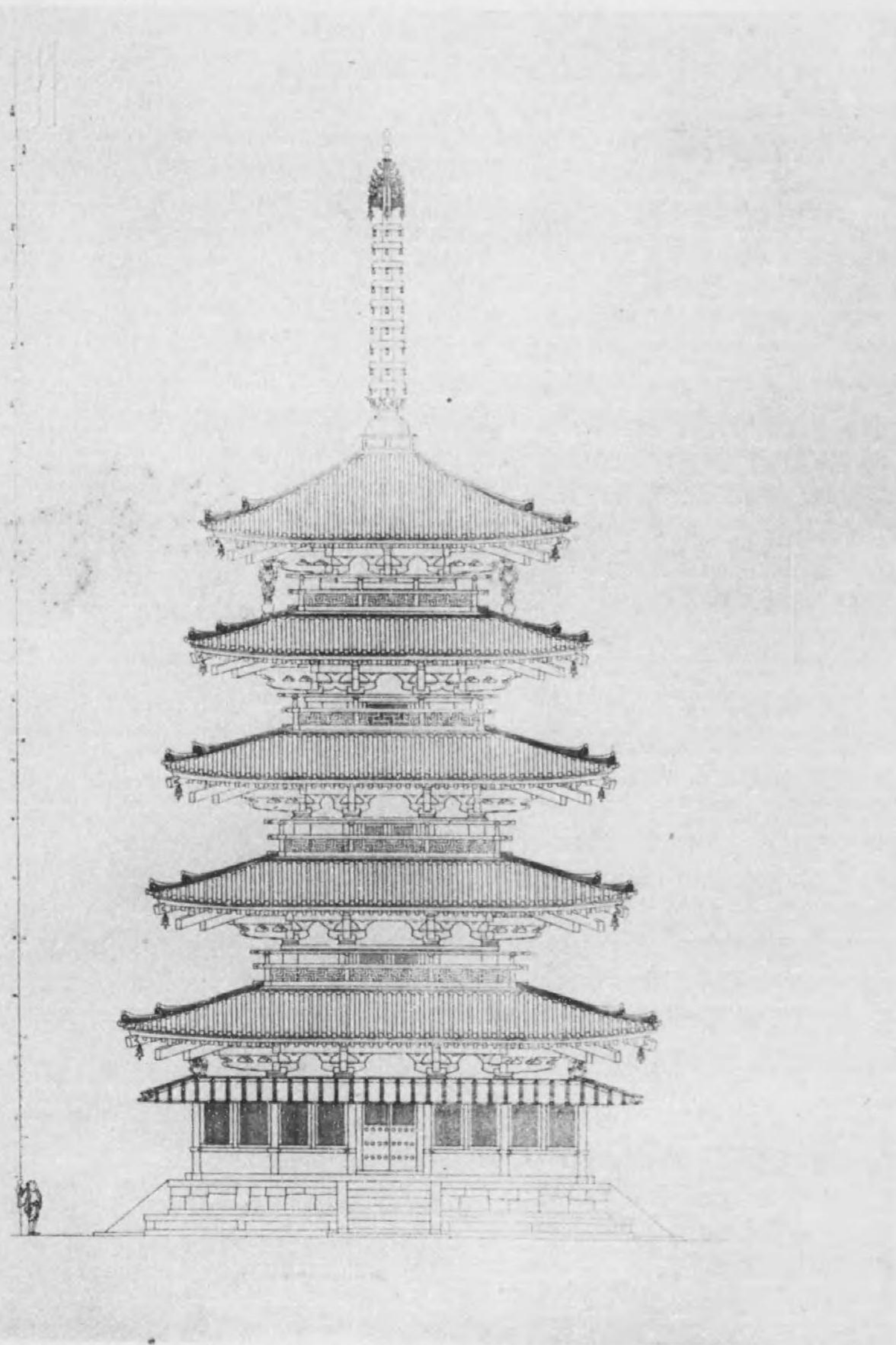
第十三、御物 額縑裂

これまた第三集に出せると同種のもの、其變化を現はさん爲め、重
ねて之を載録す、



塔重五





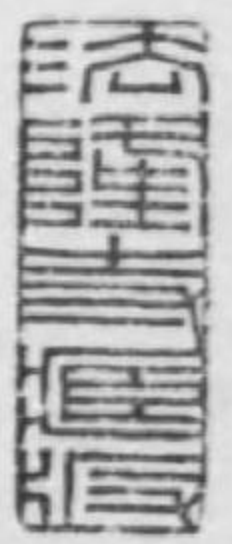
五重塔建圖



(一七) 像立薩普世觀面九檀白藏封網



(二九) 像立薩菩音世觀面九檀白藏封網



(三) 像立薩菩音世觀面九檀白藏封網



(四九) 像立薩菩音世觀面九檀白藏封網



(五其) 像立薩菩普世觀面九檀白藏封網



(六九) 像立薩菩香世觀面九檀白藏封網



像坐薩菩音世觀輪意如彫木藏封網

獻法隆寺

御帶壹條

繫膜斑犀角金銅裏鉸具以碧絕纒

刀子壹口

大沉香把斑竹鞘金銀莊口及鞘口尾以金鑲口邊月赤紫黑紫綢緞係

御刀子壹口

犀角把白牙鞘金銀莊口及鞘口尾以金鑲口邊月白組係

御刀子壹口

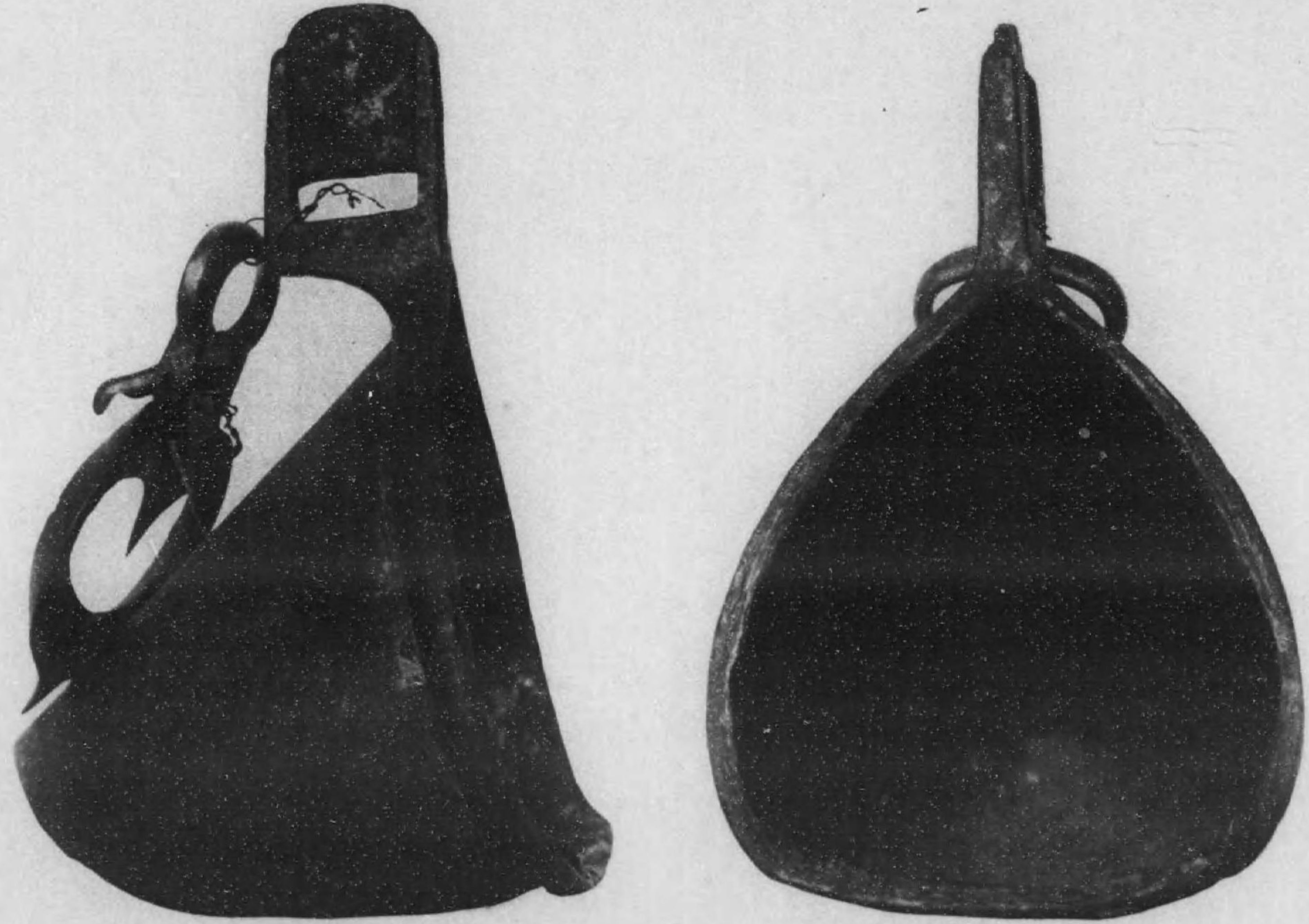
犀角把金銀莊口水牛角鞘白組係

青不香心節

右並盛漆草箱又成紅絲綢地高

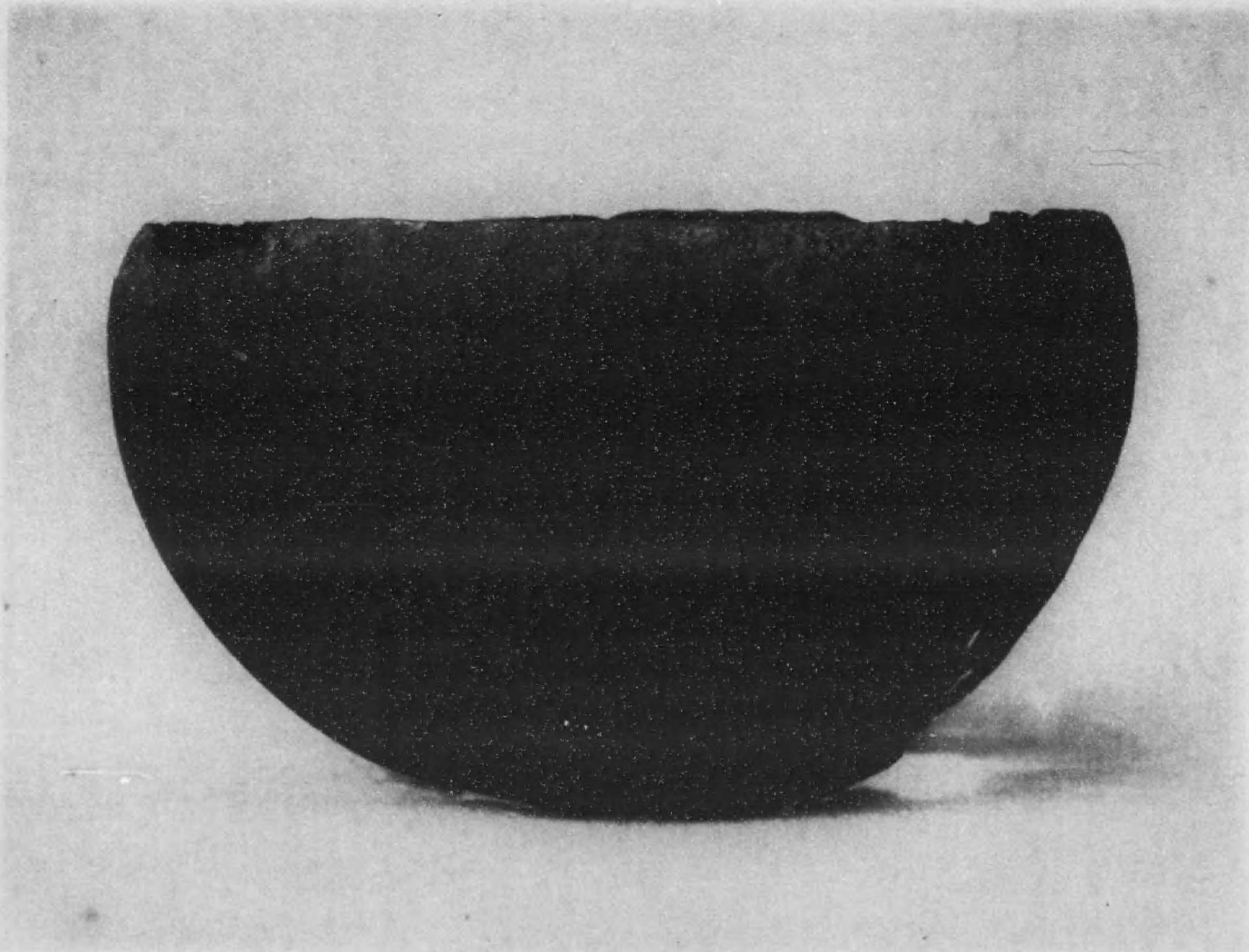
麗錦淺絲縹縷裏成又絲地高麗錦





御物壺

御物壺



御物

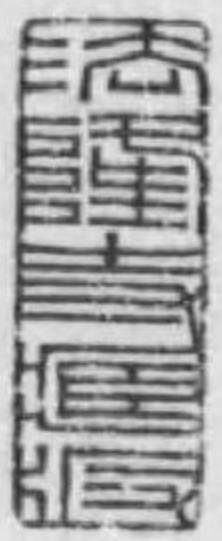
御物 傳弘大法師所用鉢鉢



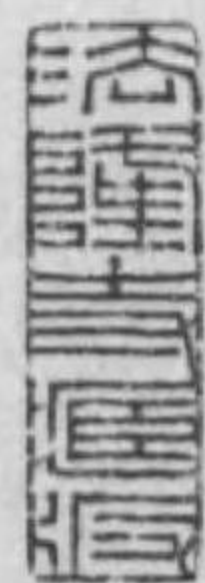
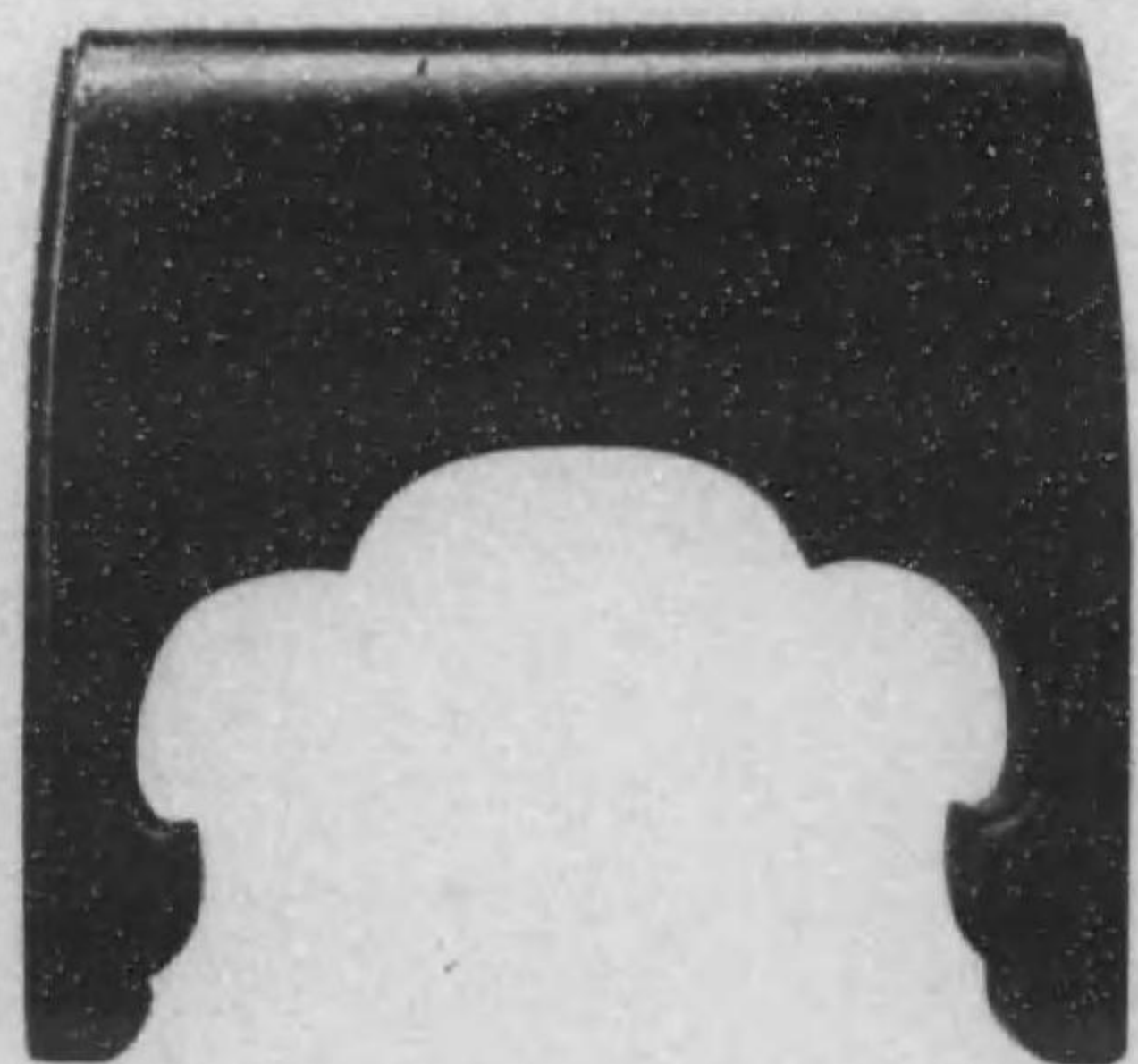
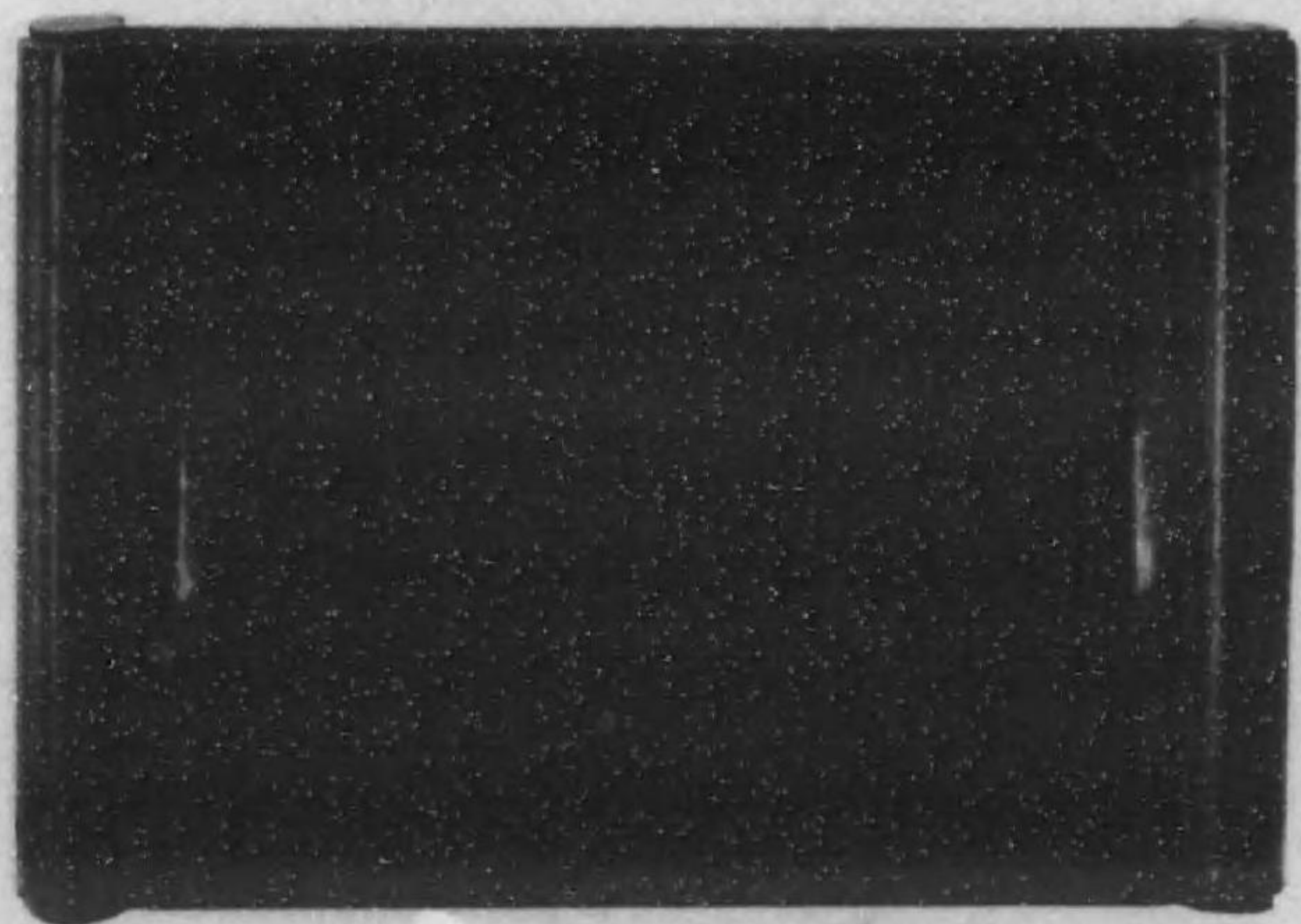
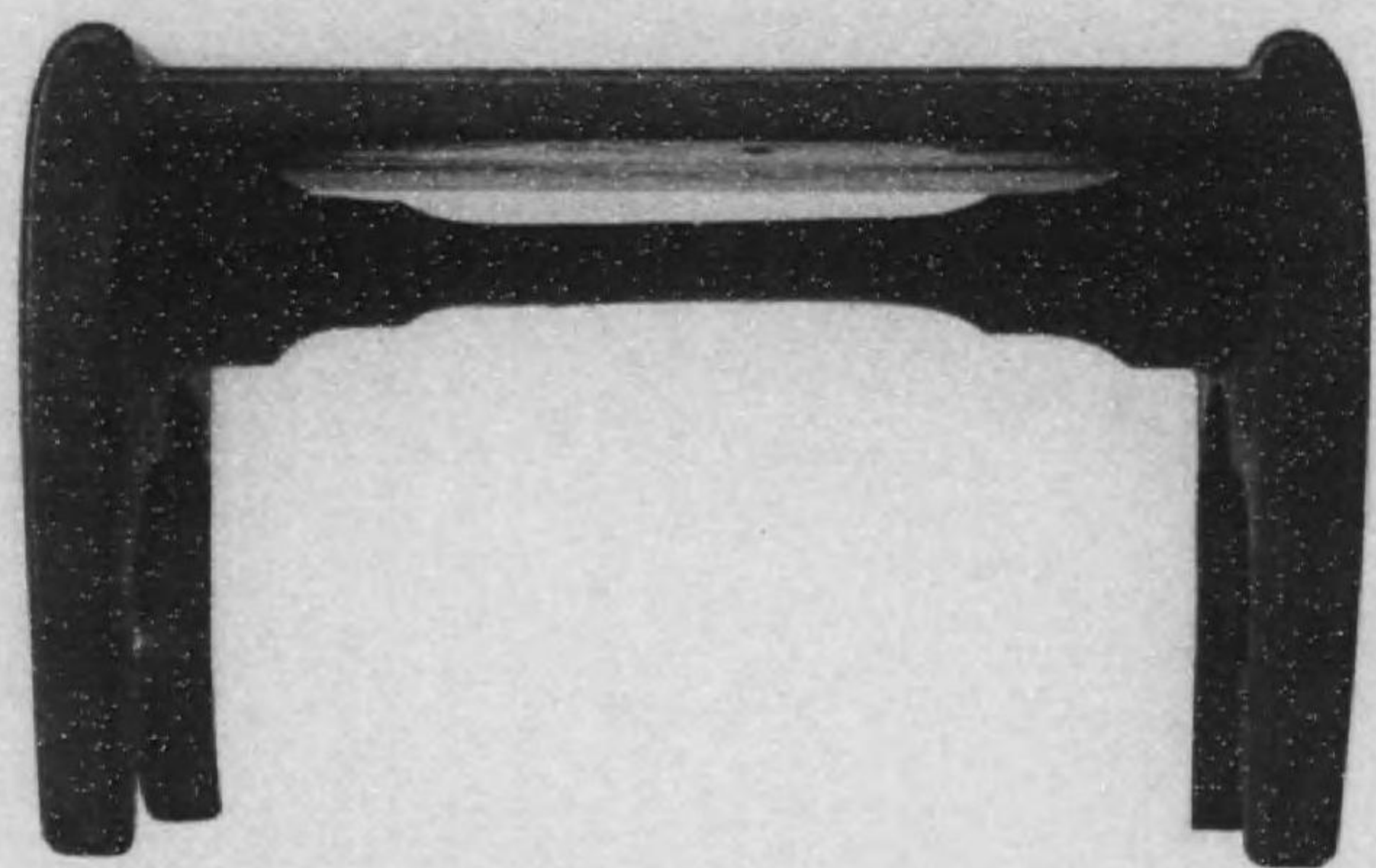
研面猿物御



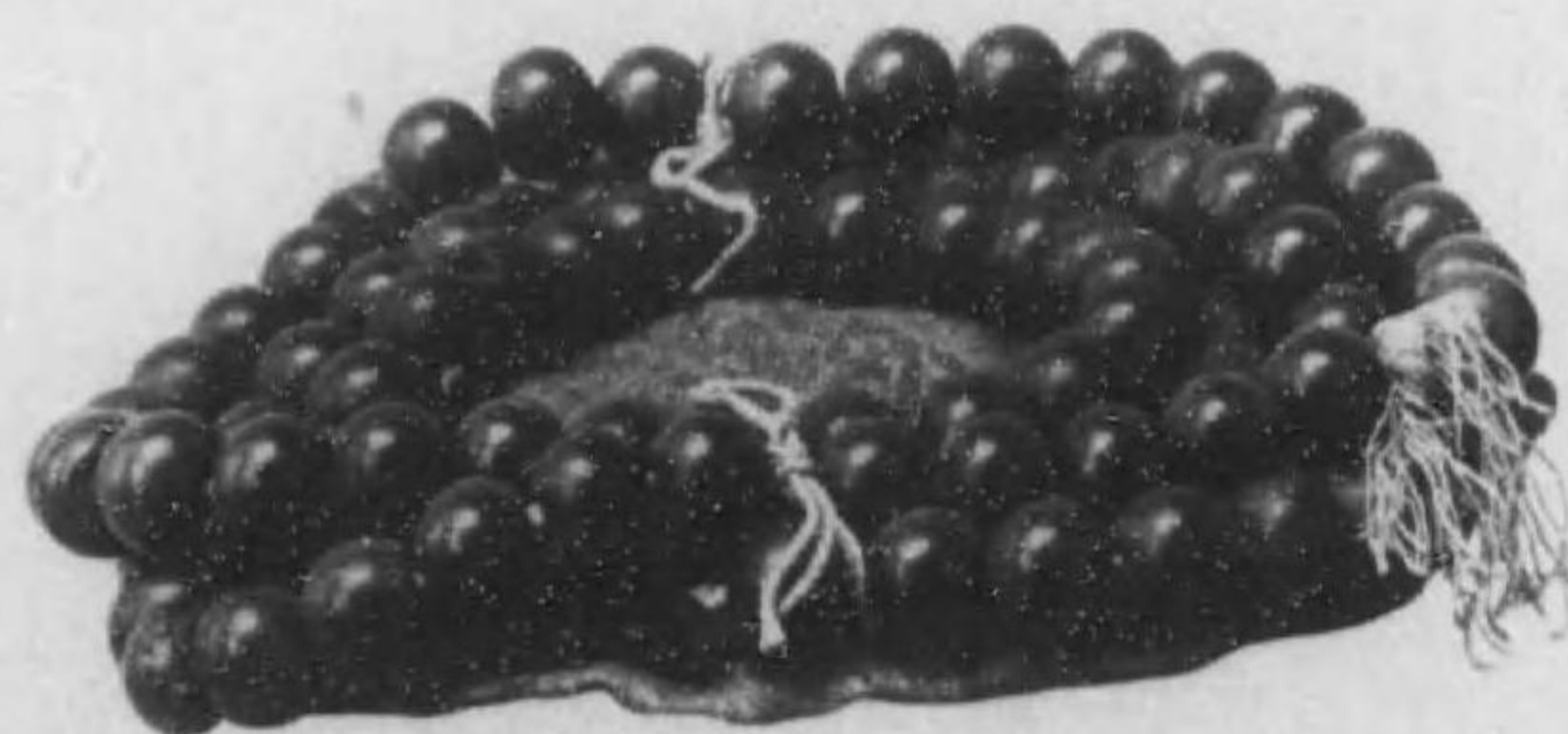
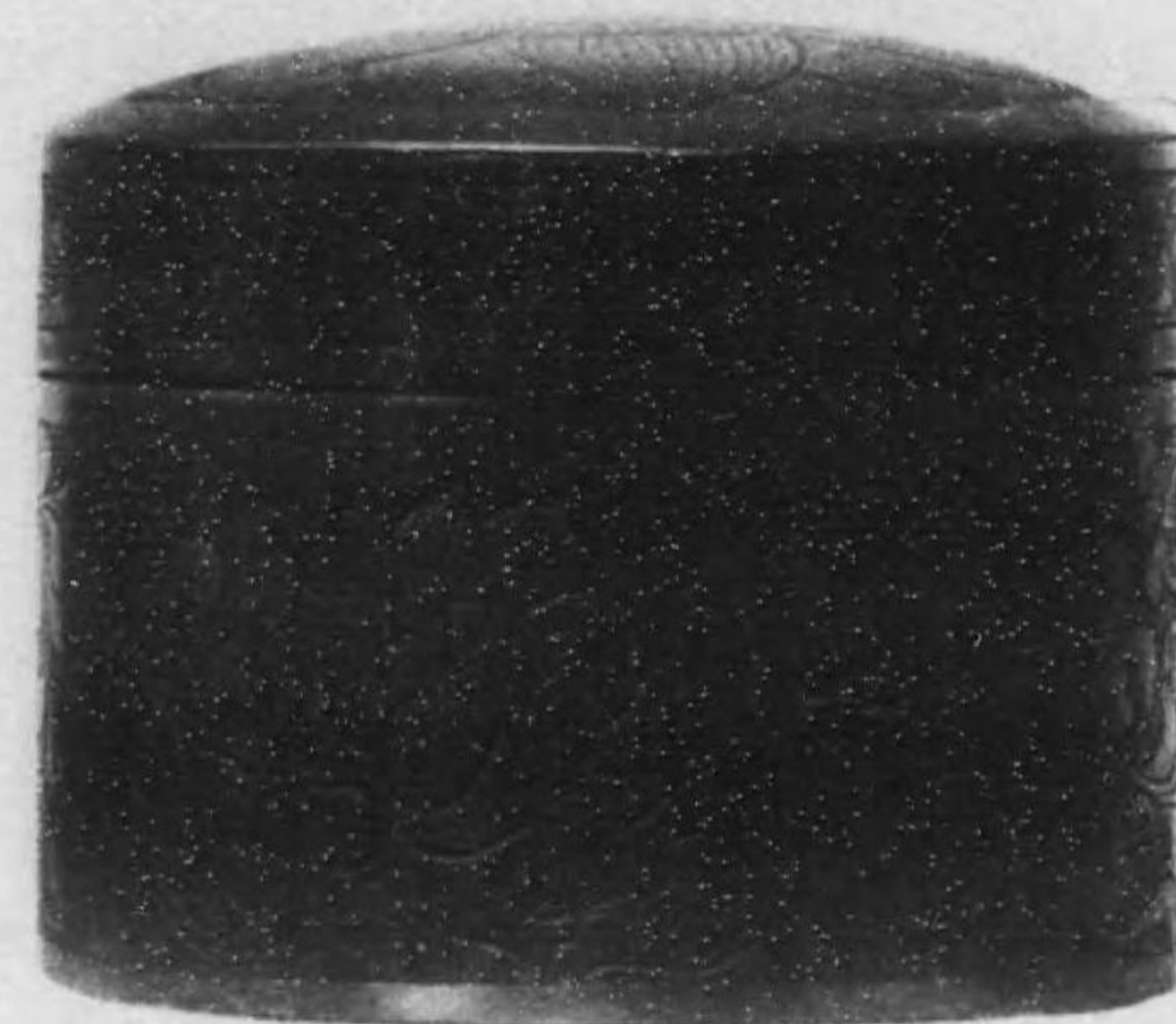
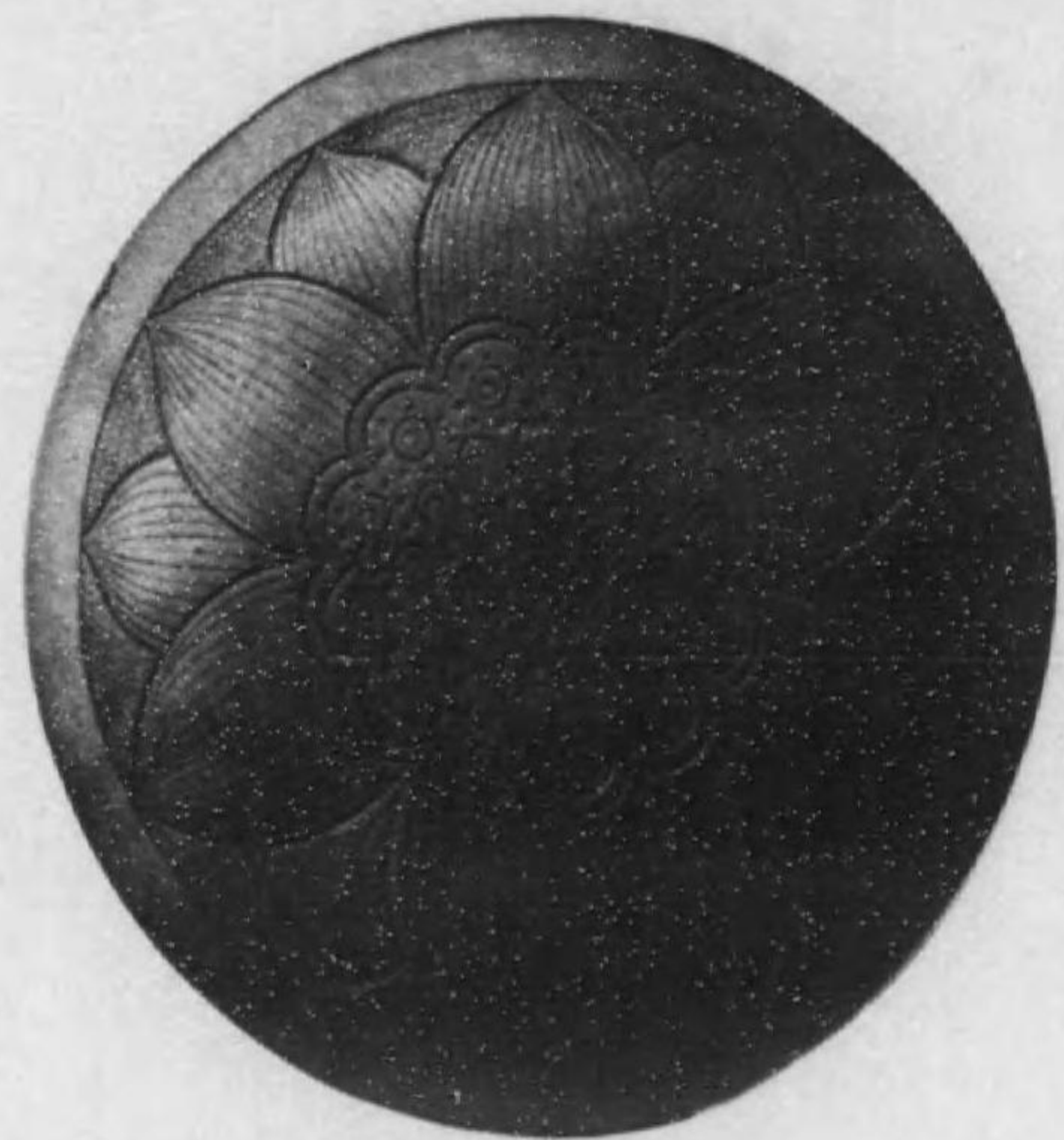
(一七) 面樂伎彫木 物御



〔其二〕 面樂伎彫木 物御



御物用被臺



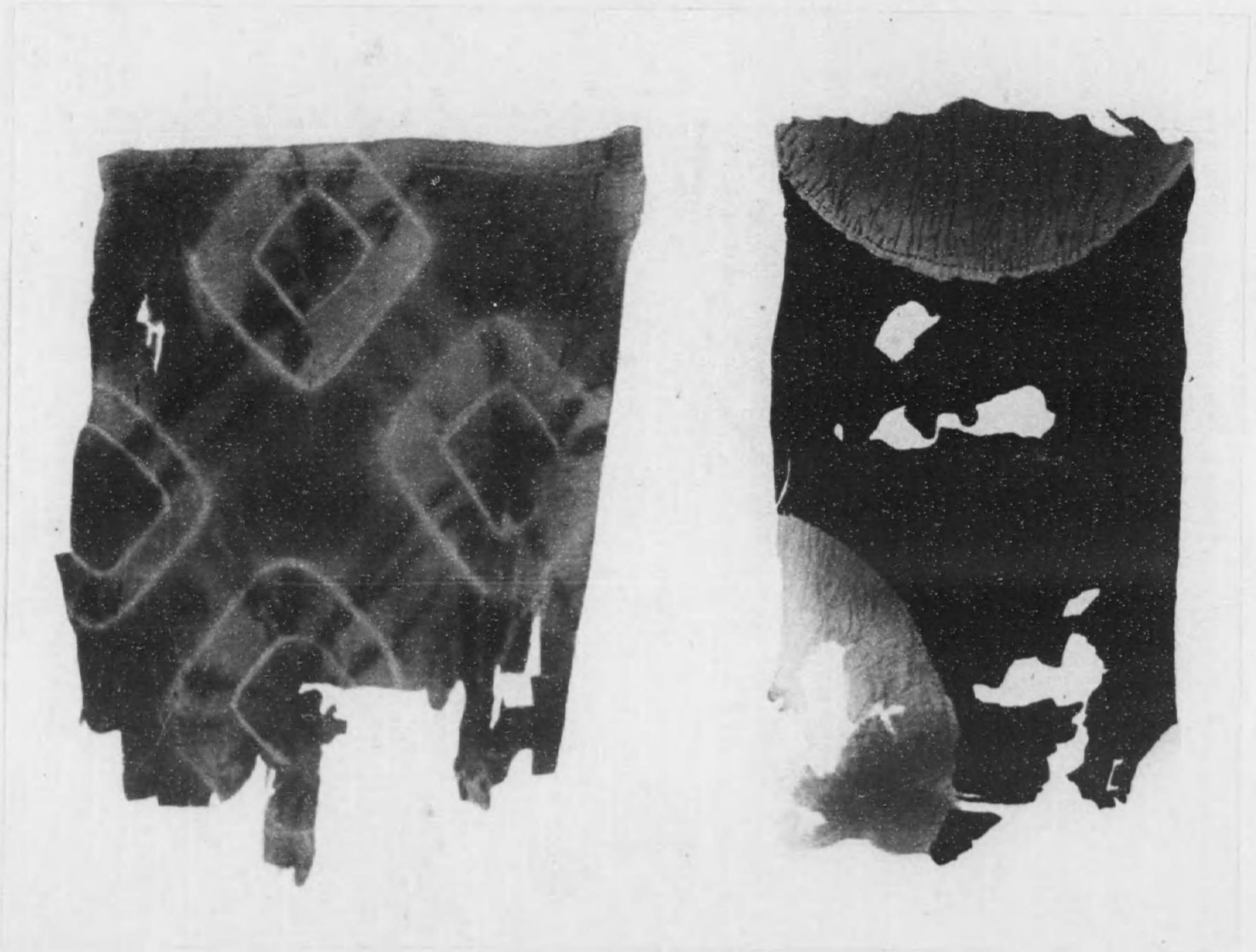
御物 琥珀念珠及篋

Handwritten text in a dark rectangular box, likely a transcription of an ancient manuscript. The text is dense and appears to be in a classical Chinese or related script.

Handwritten text in a dark rectangular box, likely a transcription of an ancient manuscript. The text is dense and appears to be in a classical Chinese or related script.



本梵尼羅陀勝尊及經心業羅多貝 物御



御物類

御物類

大正三年二月廿二日印刷
大正三年二月廿五日發行

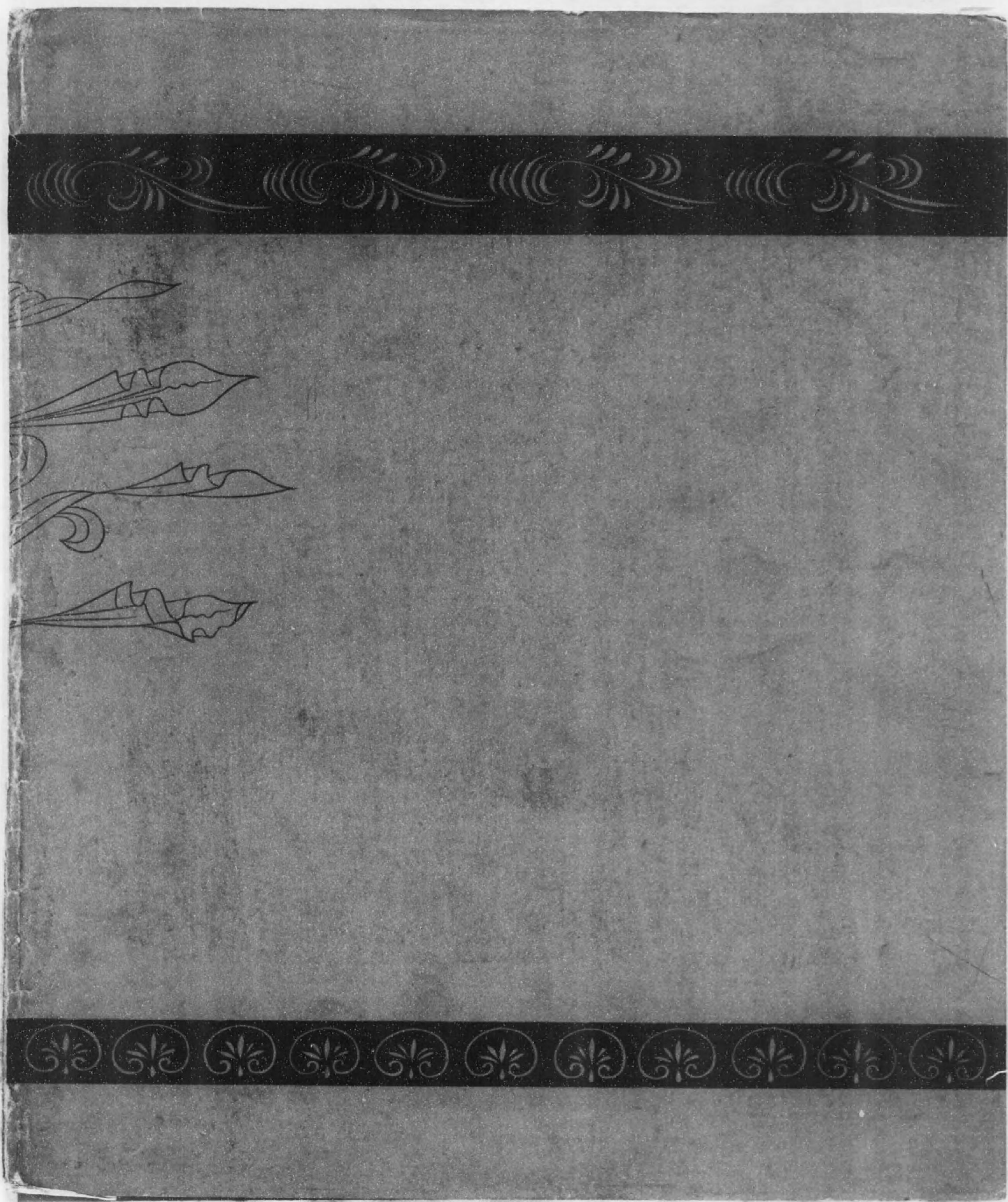
(第四集二十枚)

大和國法隆寺藏版
東京美術學校編輯

發行者 白石村治
東京市下谷區上根岸町一二二番地

印刷者 武田勝之助
東京市下谷區中根岸町六八番地

發行所 墨彩堂
東京市下谷區中根岸町六八番地



終